

チョコレートの魔女は微笑まない。

チ
ョ
コ
レ
ー
ト
の
魔
女
は
微
笑
ま
な
い
。

はじめに

あなたは、この物語の主人公（プレイヤー）として、この本に現れる選択肢の指示に従ってページを読み進めてください。

主人公 星野 真白 十六歳 高校二年生。この物語の主人公であり、読者であるあなたの分身です。

桐谷 理沙 十六歳 高校二年生。真白と同じ高校に通う親友。メイクやおしゃれなものが好き。

リリイ チョコレート専門店の店主。不思議な力があるというが…？

1

冬の冷たい風が頬を刺す放課後。高校二年生の星野真白は、親友・桐谷理沙との帰り道に立ち寄るため、いつものように商店街を歩いていた。

真白と理沙は高校入学時に知り合い、図書委員会に所属したことで仲を深めた。真白は自分の仕事をきちんとこなす一方、理沙はどちらかというと昼休みに一人で図書室を訪れては、空いてる席を仮眠室代わりに使うことが多かった。

たまに本を読んでいるかと思えば、十代の女性向けファッション雑誌を読むといった具合だ。

おしゃれやアクセサリーが好きな理沙の影響で、真白も趣味の読書以外にもファッションに興味を持つようになった。

「真白、そういえばリップ変えたでしょ」

「うん。前に理沙がオススメしてくれた色付きリップ買ってみたんだ」

「あ、やっぱり！」

「どの色がいいか迷ったけど、買ってよかった。学校につけていつでも先生にバレないし」

「でしょ？ 薄付きでもちゃんと色が映えるから、かわいいんだよね！」

理沙は可愛いものが好きらしく、彼女が気に入ったものをいつも真白に教えた。理沙は図書館にいるときはいつも静かに一人で過ごすが、真白といるときは彼女の好きなものについて笑顔で語った。その時間が真白は大好きだった。

帰り道に商店街を通るのも、二人で一緒にドラッグストアや百円ショップに行って、手頃な価格のヘア

アクセサリーやメイク用品を見るのが放課後の楽しみの一つだったからだ。

するとちょうど書店の看板が見えてきた。

「あ、理沙。ちょっと本屋さんに寄って良い？ 取り寄せてた本が届いたって連絡があって」

「うん、いいよ。何の本を買ったの？」

「えっと……」

真白が取り寄せた本は……

A 英語で書かれた人気映画の原作本（1―1へ）

B ハーブに関する本（1―2へ）

1―1 英語で書かれた人気映画の原作本

『ピーター・ハスターと賢者の指輪』って、映画あったでしょ。それを原書で読んでみようかなって」

「げ、原書？ 全部英語で？」

「うん……勉強になるかなと思って……。日本語の原作は小学生の時に読んだことがあるんだけど……。だからあらすじは大体頭に入ってるから、わからない単語があっても読み進められるかなって……」

「あ、それ映画のシリーズなら全部見たよ！ スピンオフのさ、魔法学校の先生とラスボスが戦うやつも

最高だったな。主役の俳優さんが超イケメンでさ……」

「えっ、待って待って、私まだそれ見てない！」

「マジ？ 早く見た方がいいよ！ また続編の新作が制作されるって噂。真白もきつとあれ好きだよ」

「ほんと？ 気になるなあ」

「じゃあさ映画始まったら、一緒に行かない？」

「うん！」

二人は映画の話とイケメン俳優の盛り上がりながら書店に入った。（1―3へ）

1―2 ハーブに関する本

「ハーブの本だよ。最近、お母さんと一緒にハーブにハマってて」

「へえー、面白そう。ハーブって、なんかアロマとかハーブティーとか？」

「そうそれ。お母さんはミントとかバジルとかを家庭菜園して料理に使ってたんだけど、調べてたらなかなか面白くて。知ってる？ ハーブって古代から薬草として使われてたんだって」

「そーなの？」

「エキナセアとか、風邪やインフルエンザの予防になるハーブもあるんだよ」

「真白めっちゃ物知りじゃん！ 他には？ 美肌とかダイエットに効くハーブとかある？」

「うーん、あると思うけど……。本買ったら一緒に読んでみる？」

「うん！ 読みたい！」

二人は賑やかに話しながら書店へ入った。(二三へ)

1—3

真白が目当ての本を買い、二人で商店街を抜けると、静かな住宅街へと繋がる道に入った。ふと、隣で歩いていた理沙が止まった。

「あれ？ ねえ、真白。ここにこんな店あったっけ？」

理沙の声に促されて顔を上げると、目の前に見慣れない店が現れていた。アンティークな外装に、手書き風の看板がかかっている。

Chocolaterie Märchen

柔らかな筆記体の文字が、ややくすんだ木製の看板に彫られていた。その名の通り、チョコレート専門店のような店だ。

「なんかおしゃれじゃない？ 入ってみようよ！」

興味津々の理沙に引つ張られ、真白は渋々その扉を開ける。

中は外見以上にレトロな雰囲気で、重厚なショーケースに色とりどりのチョコレートが並んでいる。

「いらっしやいませ」

奥から現れた女性は、一瞬で目を引く美しさを持っていた。白い肌に銀髪、どこか冷たさを感じさせる

深紅の瞳。彼女の周囲だけ、時間が少し違う速度で流れているような錯覚を覚える。

アルバイトの店員なのだろうか。年齢は真白と同じくらいか少し年上くらいに見える。ヨーロッパ系の外国人だろうか。少なくとも、アジア人には見えない。

「チョコレート、好き？」

女性の低い声に、真白は一瞬戸惑った。しかし、その一方で理沙はすぐに満面の笑みで頷いた。

「大好きです！どれも美味しそう！ねえ、真白も見て！」

理沙はショーケースを眺めながら真白の手を引っ張った。

「でも、ちょっと高そうだよ、理沙……」

真白は小さな声で理沙に耳打ちした。

すると女性は小さな包みを取り出した。それは濃厚なダークチョコレート一粒だった。

「これをどうぞ。最初の一粒はサービスです。どんな味がするかは、あなた次第。」

「え、試食？ ラッキー！」

すかさず理沙がそのチョコレートに手を伸ばした。

真白は疑問を抱きつつ、遠慮げに理沙がチョコレートを口に運ぶのを見ていた。瞬間、理沙の表情が変わった。驚き、困惑、そして涙。何かを思い出したように震える。

「これ……これって……！」

理沙の目から涙が溢れ出す。何が起きているのか分からない真白は、彼女を支えながら慌てて問いかけた。